

王舎城、ラージャガハで修行僧の集団が減びない為の教えを弟子たちに説いた後、お釈迦さまはナーランダールを経てガンジス川を渡ります。そして、いくつかの村を通りナーディカ村に赴きます。

ナーディカ村では、弟子アーナンダより、この村で亡くなった十二人の修行僧や信者それぞれの死後について問われます。

お釈迦さまはそれぞれの死後について説明をした上でアーナンダにこう語ります。

「アーナンダよ、人間が死ぬというのは不思議なことではない・・・。

しかしそれぞれの人々が亡くなった時に、その意義を尋ねるとしたらそれは大変な事だ。それ故に私は『法の鏡』について説こう。それにより弟子たちは自らの生き方をはっきりと見極めることができるだろう・・・。」

この『法の鏡』とは・・・、

真理に目覚めたもの—「仏」に対して清らかな信仰を起こしているか・・・、

仏の教え—「法」に対して清らかな信仰を起こしているか・・・、

仏の教えにそって生きる者のつとめ—「僧」に対して清らかな信仰を起こしているか・・・。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

という三つの宝「三宝」への信仰を持ち、戒律を守って生きるという事であると釈迦さまは説明します。

そしてそれを実践して生きる事ができるならば、みずから自分の死の問題を受け止めることができるだろうと語ります。

三宝つまり三つの信仰の実践と、規則正しい生活を『法の鏡』に照らし合わせるように省みて、それにより自分のお悟りへの修行が正しく為されているという姿を確認するという事でしょうか。

釈迦さまは、弟子たちに今後の生き方を自ら見極める事を促しているように思います。あたかも釈迦さまの亡き後の弟子たちを思っているように。

— 終 —